

松の内もまだ明けない正月5日の朝、仕事初めとはいえ、事務所まで歩く道すがらの街の雰囲気はまだお屠蘇が抜けきれずに、どこか正月気分のなかにあるようだ。郵便受けにたまっていた年賀状の束に目を通して見ると、すぐ小一時間がたっしまい、あわてて戸締まりをして向いの停留所で大森行きのバスを待つ。朝日に照らされていても吐く息が白くなる冷たさ、光の粒が見えるほど澄みわたった青空が広がっている。待つほどもなく小さなしめ飾りをつけたバスが、フロントガラスに朝の光を映してやって来た。

乗り込んで、いちばん後ろの一段高くなった座席に座る。街もバスも運転手の表情にも、無事に正月を迎え終えた、どこか清らかな空気がただよっている。いつもは老人ばかりのバスが、今日は若い女性や子供を連れた家族もいてにぎやかだ。馬の背道の高台にある白田坂上バス停からは、遠くの羽田や川崎辺りまで、ジグソーパズルのような家並みがくっきりと見えていた。



大森駅と品川駅間の継ぎ目のないロングレールを、真新しいE233系は滑るような乗り心地で走る。乗り換えた品川駅の広い連絡橋は、華やかな駅ナカショップで百花繚乱の大にぎわいだ。さながら現代版品川宿といったところだろうか。わずか十数年前、新幹線の駅ができる前の品川駅からは、とても想像できない変わりようだ。

海寄りの新幹線南改札口の切符売場の奥に、椅子とテーブルが並んだ待合いスペースがある。少し時間があるので、キオスクでコーヒーを買ってその隅に腰を下ろす。キャリーバックを引きずって、若い女性が空いている席を探している。もう何時間も座っていそうな、うらぶれた風体の老人、曰くありげな中年カップル、待合室は本来なら交わることもない、さまざまな人生の交差点だ。

電光掲示板の表示では、これから乗る20分後の新大阪行き「こだま」号まで、先発の「のぞみ」がまだ4本もある。手にしていた小型時刻表を見ると、1時間に13本もの列車があって、山手線並みの過密ダイヤだ。3分間隔、時速300キロで疾走する16両編成の新幹線、ホモ・モーベンスという言葉思い出す。「移動する人間」とは、はたして本能なのか煩惱なのか、そんなことをぼんやり考えているうちに、案内アナウンスが、こだま649号の名前を呼んでいた。あわてて飲みかけのコーヒーを持ったまま、2番線ホームに下りた。



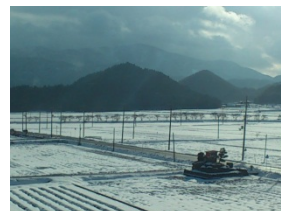
階上コンコースの天井と、南側の駅ビルにはさまれた新幹線ホームは、昼間でもトンネルのなかのように暗く、フロア音を響かせながら入線してきた700系こだまは、ヘッドライトのふたつ目玉が光る白い大蛇のようだ。はらわたの中にもぐりこむと、グリーン車の胃袋に乗客の姿はなくならなうだった。

11時04分定刻に、空腹のまま大蛇は走り始めた。ガラス張りのビルに快晴の青空が映り、山手線と離れると車体を傾けながら大きく左にカーブして行く。環七を過ぎ、第二京浜をトラス橋で渡るまでは、下に横須賀線が通る2段高架なので見晴らしが良い。雪谷の切り通しへ入る直前、ほんの一瞬だけ、左手の小高い山の上に池上本門寺の五重塔が見える。

こだま号の割引切符はのぞみの切符より安く、しかもいつでも空いている。のぞみではなぜか見る気にならない外の景色が、こだまの窓からはよく見えるから不思議だ。米原付近降雪のため遅れが生じるかもしれないとの車内放送がある。



正午ちょうどに着いた三島駅での通過待ち停車の間、ホームの売店でゆっくり品定めをして駅弁を買った。沼津桃中軒のミニ懐石弁当「冬うらら」は、どのおかずもしっかりとした上品な味付けで、冬晴れの青空のもと冠雪した富士山を眺めながら味わう贅沢。由比海岸にきらめく駿河湾のさざ波、静岡あたりの茶畑もまぶしく、大井川、天竜川を渡る。鉄道唱歌では「煙を水に横たへてわたる濱名の橋の上」と歌われた、両側の窓に広がる浜名湖の絶景、特色豊かな風景にしないで上方に近づく実感がわくのも、「こだま」ならではの趣。名古屋で子供連れの家族が下りてゆき、さらにガラとした車内のまま、関ヶ原にさしかかると、それまでの青空が一変して、暗灰色の雲が広がると、あっというまに雪景色に変わった。窓ガラスに雪がぶつかりそのまま凍って張り付いている。昔の旅人なら難儀をしたに違いない関ヶ原も、現代の大蛇はほとんど速度を緩めることもなく、ブルッと身震いをして体を傾けながら突っ走って行く。



雪景色の関ヶ原越えで徐行した数分の遅れをものともせず、こだまは新大阪駅に定刻に到着。

気密ドアがブスッと開いて、700系宇宙船から外へ出ると惑星の外気は思いのほか寒い。

こだまから降りた乗客は少なかったもののホームから階段をおりると、改札フロアは乗り換え客でごった返していた。人いきれの熱気にまじって、大阪特有の食べ物と、街と人の体臭が混じりあった猥雑な匂いが押し寄せてくる。その匂いに誘われるまま、改札口を出てさらに階段を下りると、御堂筋線改札口へと長い地下道が続いていた。匂いのもとはこのあたりのようだ。

うろろう物色しながら歩いていると、大阪名物新世界串カツの赤い幟を立てた立飲み居酒屋が、もう昼間からソースの匂いを漂わせて盛業中だ。その隣にある小さなケーキ屋のショーケースからは、黄色い仮面の奇妙なケーキがこちらを覗んでいた。よく見ると、ドクターイエローを模したケーキで、さすがに浪花の商魂はたくましい。どんな味がするのだろうか。向かい側にあるベーカリーで、今夜のフェリーでの夜食用にとパンを買う。



地下鉄改札口に着くときつぷの販売機には、スイカパスモは使えません！

との張り紙、小銭を入れても画面が変わらないので戸惑っていると、後ろに並んだ若者に「先に人数おすんやがな！」と教えられ、すっかり田舎から出てきたお上りさんになってしまった。

こだまを降りてからまだ10分もたっていないのに、上方文化の洗礼はなかなか強烈だ。

大阪の電車はいつも心配になるほど空いていて、千里中央駅始発の御堂筋線、なかもず行きも、ロングシートにまだ空席があるほど。新大阪のつぎの駅は、「にしなかにまみなみかた」と舌をかみそうな名前だが、テープのアナウンスはどもることなく、早口言葉のようにしゃべるのがおかしい。

地下鉄とはいいながらこの辺りでは、御堂筋道路を行き交う車の群れと並走して、地上に出たモグラの気分だ。長い淀川鉄橋を渡ると、やっと御堂筋と分かれて右カーブしながら地下へ潜っていった。地下へ入る瞬間にワクワクしているうちに大阪駅に着いた。迷宮のような梅田地下街は何度来ても迷ってしまう。電車は空いている大阪も、この地下街だけはいつも大勢の人で溢れている。歩きながらも、大阪の人はよくしゃべる。なつかしい大阪弁を聞きながら、流れに乗って歩くと、東京では感じられない不思議な心地よさがある。串カツ屋のカウンターには、大きな暖簾で顔が見えない客が、お尻を向けて並んでいて、その先は阪神電車の改札口になっている。



西宮に住んでいた小学生の頃、日曜日には阪神電車に乗って、梅田駅まで買い物に連れられて来たものだった。地上の大阪駅付近の建物はすっかり変わっているが、地下の商店街は記憶にあるまま変わらない印象だ。左手に向かうと「ホワイトイメダ」のにぎやかな地下街が続き、初詣らしい華やいだ和服姿の女性もいる。迷路のように入りくんだ路地が八方に広がり、まえに来た店が見つからなかったり、来るたびに違う店があったりしていつも方向感覚がおかしくなる。

谷町線東梅田駅の改札口から、さらに左に折れて阪急エリアの方に歩いて行くと、通路の両側に居酒屋、鮎屋、串カツ屋など、あらゆる飲食店が緑日のように続いている。

客の目を引こうと趣向を凝らした店先のサンプルやチラシが派手で、いかにも大阪特有のアクの強さがある楽しい。

このあたりは、ちょうど大阪駅構内線路の下を横切っているはずだ。

阪急三番街まで来ると、店構えも客もどこか洗練さを感じられるのは、阪急という先入観のせいだろうか。阪急電車梅田駅のある広いホール

は伽藍のような吹き抜けになって、重厚なたたずまいを見せている。奥にあるK書店の右手には、高級ブランドのブティックも並んで、いかにもキタのターミナルらしい上品な雰囲気が漂っていた。



地上に出ると、排気ガスまじりの冷たい風が、ビルの谷間を吹き抜けていた。頭上に覆い被さっている高架線路は阪急電車の3複線だろうか。ガード下のバスターミナルは薄暗く、大型高速バスが頻繁に発着している。陽差しがさえぎられ、影が見えないので方角の見当がつかない。

フェリー埠頭への連絡バス乗り場は、旧梅田貨物ターミナルの向こう側にある新しいビルにあるはずで、もらっていた案内図によると、線路をくぐる長い地下道を渡らなければならない。空を見上げると、工事の高層ビルからいくつもクレーンが腕を突き出している。むかし大阪鉄道管理局があったという場所は、Yカメラの巨大なビルがそびえている。錆の浮いたフェンス越しに貨物ヤードの引き込み線路と、朽ち果てたままの日通の建物が見える。その線路の下に吸い込まれるようにして、地下道

の入り口があり、「梅北地下道」と書かれた煤けた銘板が嵌め込まれている。人の出入りがなければ、うっかり通り過ぎてしまいそうな地味な入り口だ。ひび割れた階段を下りると、天井の低く白いトンネルが、はるか先までまっすぐに続いていた。300メートルはゆうにありそうな長い地下道だ。

今は使われなくなった国鉄貨物ターミナルの広大さを実感させられる。狭いトンネルのなかで、すれ違う女子高生グループのお喋りが反響して、いっそう賑やかに聞こえる。

階段を上ると街の雰囲気が一変して、緑豊かな公園に囲まれたガラス張りの真新しいビルが整然と並び、線路の反対側とは別世界に迷い込んだ気になる。背後で列車が通過する音に振り返ると、フェンス脇の貨物線を紀勢線特急「くろしお」が駆け抜けて行った。閑空行きの特急「はるか」もこの連絡線路を通るのだろう。結界の境を縫って本来あるはずのない線路を通る列車は、亡者の乗客を乗せていたのか、ガラス越しに見える車内に人の姿はなかった。広い道路には車も少なく、ビルの中にも人の姿がまばらで、どこか別の惑星に来てしまったみたいだ。



大理石の床の先に、アンドロイド風美女の案内嬢がひとり、寒いロビーで氷の微笑を浮かべて座っていた。場所を聞いて、そちらですと指差した二の腕が透き通るほど白かった。教えられたフェリー連絡バスの待合所に入ると、宇宙空港のロビーかなと思う奇妙な形のベンチが置かれて、吹き抜け天井からはリング状の照明灯が下がっていた。暖房が効きすぎて暑いくらいだ。

広いホールには、数人の客が所在なげにパソコンや携帯に向かっているが、夜行高速バスの発着がメインで、昼の時間のバスターミナルは閑散としているようだ。

受付カウンターにも人の姿がない。やっと奥から出てきた女性に、予約番号の紙を渡して、フェリー埠頭までの料金400円を支払う。

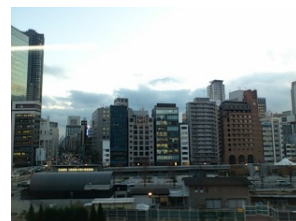
「時間がきたらお名前をお呼びいたしますから」といねいな標準語で言われて戸惑ってしまう。ふかふかのソファに座り、ダウンジャケットとついでにセーターも脱ぎ、シャツ一枚になってもまだ暑い。ガラスの外は凍える寒さなのに、ここは洒落たBGMも流れて優雅なリゾートホテルにいるようだ。



空港の搭乗口にも似ているゲートがあるが、いっこうにバスが発着しそうな雰囲気がない。本当にバスが来るのだからと心配になったころ、やっと名前を呼ばれた。ほかに乗客は中年夫婦二人だけのようだ。スチュワーデス風の若い女性係員に先導されてゲートから外へ出ると、冷たいビル風にあわててジャケットのボタンを締め直した。前屈みになってスカートの裾を押さえている彼女について、中庭を横切り隣のブロックにある駐車場まで歩くと、やっと大型バスの姿が目に入った。寒いだろうにバスが見えなくなるまで、深々とお辞儀をしたままの彼女に見送られて、たった3名の乗客を乗せて大型バスはエンジンをふかし、広い道路を左折すると環状線梅田ランプの坂をかけ登って、周回軌道に乗った。

大阪の高速道路は時計回りの一方通行になっていて、台風のように同じ方向にぐるぐる車が走っている。ピンク色のバスは、3人しかいない乗客を乗せて夕闇に包まれはじめた浪速の街を見下ろしながら快調に飛ばして行く。

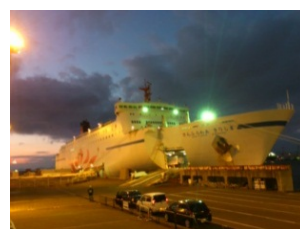
土佐堀運河の川面に街のネオンが写る。環状線を進むにつれて、右窓に見えていた夕陽が左に移り、しばらくするとこんどは前から変わった。シルエットになった工場の煙突群が対岸に見えてきた。怪獣の肋骨にも似た巨大な橋を渡るともう埠頭が近いのか、コンテナを積んだトレーラーとすれ違うようになった。灰色の倉庫が立ち並ぶ広い道に出て、なんとなく場違いなピンク色のバスは信号を曲がり、いくつかの橋を渡ると、すっかり日の暮れたフェリー埠頭に着いた。すでにトラックや自家用車は乗船してしまったのか、広い駐車場には車の姿は見えず「宮崎・志布志行きフェリー」の古ぼけ赤いたネオン看板が屋根の上に寂しげに光っていた。バスのガラス窓いっぱい「さんふらわあきりしま」の巨大な船体が見えていた



出航時間がせまって、もうあらかたの乗船は済んでしまったのか、それとも徒歩で乗る客が少ないのか待合室に人の姿はなく、空の椅子が並んでいるだけだった。急ぎ足で受付カウンターに行き、予約券を渡して乗船券を発行してもらおう。すると発券していた窓口嬢の手が止まり、こちらの顔をうかがいながら、お歳は60お過ぎすね。ええそうですが・・・それならシニア割引で5%お安くなります！すこし微妙な感慨とともにありがたく割引切符を受け取った。

「志布志行きは左側の船ですからまちがわないように、右側は宮崎行きになります！」とシニア向けの注意を拝聴して外へ出ると、目の前に巨大な白いビルディングのような船体がそびえていた。優雅なカーブを描く船首が、薄暮れ色に染まった夕空をバックに白く輝いている。この船なら遥かな天空にまで飛んで行けそうに思える。

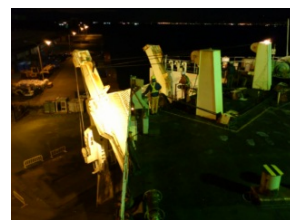
船首に大きく開いた入り口から、最後の車が乗船するところだった。振り返ると徒歩客専用の簡素な乗船口にはもう誰もいなかった。テント屋根のついたタラップから、私の今夜のマザーシップに乗り込む。防水ハッチの扉から船内に入るとすぐ立派なエスカレーターがあって、とてもこれが船の内とは思えない、不思議な気持ちのままプロムナードデッキまで運ばれた。



7階建てくらいのビルディングに相当するのだろうか、最上階がレストランになっていて、その下が乗客フロアになっている。船内は暖房が効いていて暖かい。中央には金ぴかの優雅な螺旋階段があり、2台のエレベーターも備え付けられて、豪華ホテルにでも迷い込んだ気分だ。階段の横には、まだ門松と菰樽が置かれたままで、正月らしい華やいだ雰囲気が残っている。フロントカウンターの横には、コンビニ風お土産売店、左側には自販機コーナーが並んでいて、意外に大勢の乗客で賑わっていた。制服を着たパーサーに切符を見せて、部屋に案内してもらおう。六畳ほどの細長い部屋の縦にベッドが置かれ、舷側に小さな窓がひとつと、椅子とカウンターデスクがある。曇った窓ガラスには塩の結晶らしきものがこびりついている。

出航の様子を見ようと吹きさらしの後部甲板に出て、係留ロープの取り外し作業をしばらく見ていた。突然バーンと乾いた破裂音が響くと、張りつめていた太ももほどもあるロープが一気に弛んだ。

それを合図に岸壁にいた数人の作業員が走り寄って、ナマズの頭のような係留鉤からロープをはずした。緑の手旗が振られたのを合図に甲板のウィンチがガラガラと動き始めてロープを巻き取っていった。エンジン音が高まって、岸壁と舷側とのすき間にゴボゴボと白い泡がたつと、水面が広がっていき、別れのテープもなく銅鑼が鳴るわけでもないあっけない出航、もう少し見ていたかったが、顔に刺さる冷たい海風にたまらず、そこそこに船室へ退却してしまった。



あの頃、昭和30年代、高知～神戸大阪航路には関西汽船の明石丸と、古いひかり丸の2隻が交互に就航していて、ペンキの匂いも新しい明石丸の方に乗れた時はうれしかったものだ。子供心にはとても大きな船に見えていた明石丸も、わずか1000トンの小さな船でしかなかったのだ。夕闇に包まれはじめた高知港は、いつも見送りの人々でごった返していて、蛍の光が流れて銅鑼が鳴り、無数の紙テープが舞うなか、ゆっくりと岸壁を離れて行った。旅立ちと別離の想いが、今とは比べようがないほど重味があった時代、浦戸湾を抜けて真っ暗な室戸岬の沖にかかる頃、船室の丸窓からも波しぶきが入ってきて、木の葉のように船は揺れた。室戸岬の沖を過ぎた船は夜中の2時頃、途中の甲浦港に寄港していた。港には汽船が着岸できる岸壁がないため、乗船客は小さなはしけに乗って沖合に停泊した明石丸まで運ばれてきた。船酔いと眠さで朦朧とした意識のなかで、真っ暗な海面に浮かぶ小さな船から人が乗り移る姿を、丸い窓から見た。

低く響いた汽笛の音にわれにかえると、いま滑るように左旋回している「きりしま」の窓からは、すっかり暗くなった夜空を背景にして埠頭の明かりが回り灯籠となって、ぼやけたガラスのスクリーンに映っていた。

一度だけ明石丸のエンジン室を上から覗いたことがあった。焦げた油の匂い、耳を弄するばかりのディーゼル機関の騒音におどろき茫然としていた。ずらりと並んだ緑色のピストンは、圧倒的な鼓動を生む怪物の心臓だった。しかし今、夕闇につつまれた海原を滑るように進む1万トンの船体からは、遠くハミングするかすかなエンジン音しか聞こえてこない。

部屋のテレビのスイッチを入れると、緑色の日本地図があらわれ、航海中の船の現在位置が赤い丸で表示される仕組みになっていて、船は南西に進路をとって、和歌山沖の紀淡海峡を抜けるところだった。淡路島の影が見えるかなと思い、ガラス窓に顔を近づけて目を凝らすと、黒い夜の海が広がり、灯台なのか漁船の灯りなのか、かすかな光の粒が瞬いているばかりだった。レストランの営業が8時までなのでお早めにご利用くださいと、しきりに船内アナウンスが流れている。



乗客で賑わうロビーでは、土産物を買ったりソファでテレビを見たり、それぞれの想いで船上での時を楽しみながら、日常から切り離された時間のなかで大人も子供も、どこか高揚した気分のなかにいるようだ。回り階段を上って最上階のレストランに行く。バイキングメニューで、家族連れが大きいテーブルを囲みデザートコーナーのまわりを幼児達にぎやかに走り回っている。窓際のカウンターに陣取って、ビールやコップ酒を前にして寛いで腰を据えているのは、常連のトラックドライバーだろうか。こういう場所で、仕事でもないひとり旅ではどうしても居心地が悪い。自分も九州まで荷物を運ぶトラック運転手になったつもりで、窓際の席に缶ビールと料理を盛ったトレイを置いた。

20年以上も前、阿蘇高原のリゾートホテルに飾る絵を車いっばいに積んで、東京から小倉までフェリーに乗ったことがあった。九州まで行く船なのになぜか「伊豆丸」という名前の古い船だった。

有明埠頭を夕方出航すると、翌日の昼すぎに徳島に寄港して、3日目の早朝に小倉港に着いた。引退間近のくたびれた老朽船だったが、木の香りが漂うレトロな雰囲気の内船内はあちこちペンキが剥げ古びていた。暑い夏もやっと終わった9月初め、有明埠頭を出航して夜7時を過ぎても東京湾にはまだ夏の残照が残っていた。三浦半島沖と思われるあたりでようやく暗くなった夜空に、遠く音もなく花火が上がっているのが、窓から見えた。



大部屋カーペット敷きの2等船室には、シーズンオフで乗客が少なすぎて、ひとりでは不安になったのか、夜になって若い女性客がひとり毛布を持って、こちらが少したじろぐほど近づいてきた。話かけるうち、船底にあった浴室まで一緒に連れだって行くことになった。潜水艦か宇宙船ハッチのような気密扉を、いくつもぐり抜けて降りて行った。エンジンルームと間違えそうな船底にあった浴室の入り口には、男湯と女湯と染め抜かれた二つの赤いのれんが、妙になまめかしく下がっていた。

誰もいない雑魚寝床の2等船室で、その夜はすぐ近くで寝ている女性が気になって、なかなか寝つかれないまま浅い眠りが続いた。翌日、徳島で下船していった彼女を、甲板デッキの上から探してみたが、なぜだかどうしても見つけることができなかった。

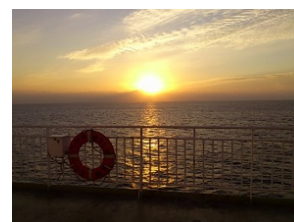
その後、伊豆丸はギリシャの船会社に売られてしまったらしい。記録によると、波止浜造船所で造られたあの船は、伊豆丸と改名される以前は「かしおぺあ」という名前だったという。あの時本当に徳島で船を降りたのだろうか、それとも彼女はカシオペアという名前のまぼろしだったのだろうか。小倉に着いて阿蘇までの道すがら、九州山地の山はその頂上まで一面のすすきにおおわれて、銀色の穂が風に揺れて光っていた。

ぼんやり記憶の海に漂っていたらもう8時前、閉店間際のレストランには客の姿も少なく、片付けをはじめたボーイ達にせかされるようにして部屋に戻った。つけっぱなしにしてあったテレビの現在位置を示す赤いランプは、もう四国に近い場所で点滅していて、暗い窓から目を凝らすと波が白い泡となって後ろに流れていくのが幻影のように見えていた。



きりしまの展望浴室は、船底ではなく客室と同じフロアにあった。誰もいない浴槽で体を伸ばしてふと窓際を見ると、「外から見えることがあります、窓に近づき過ぎに注意！」とこんな注意書きが貼ってあった。夜の海の真ん中で外から覗く者がいるのか、それが人魚姫ならぜひ見そめられてみたいものだ。

部屋に戻っても手持ち無沙汰なので、売店をひやかし自販機コーナーでコーヒーを買い、サロンのテーブルに座って行き交う人を眺めていた。夜の船の中は不思議な気持ちになる。どこにも属さない、別の世界が交差する特別な場所なのだろうか。年配の婦人客グループの賑やかなおしゃべりを、聞くとはなしに耳をそばだてていると、どうやら霧島神宮への初詣の団体ツアー客のようだ。婦人達の話の輪に入れなくて、片隅で寂しげにしているのは同じツアーの男性客らしい。壁には「船たび女子」のピンク色の宣伝ポスターが貼ってあった。夜は寝床が変わって寝つかれないことを心配したが、船は揺れもなく心地よいエンジン音が子守歌となって、ストンと眠りに落ちてしまった。夜中一二度まどろんだ時、テレビ画面の赤いランプは、ちょうど室戸岬と足摺岬の南方で点滅していた。



朝目覚めた時、窓はもううっすらと白んでいて、潮が付いてかすんだガラス越しにはるかに、陸地らしき影が見えていて、日の出の様子を見ようと東側のデッキまで急ぐと、今まさにオレンジ色に染まった水平線から太陽が昇るところだった。海風は頬を刺す冷たさはなく、思いのほかやさしく穏やかな海原から吹き渡ってきた。チャイムの後に船内アナウンスがはじまり、朝食の案内を繰り返している。階上のレストランのバイキングメニューのほかに、フロントでモーニングセットも売っているらしい。遠くに霞んで見えていた陸地の影が朝日に照らされて、緑の山並みとしてクッキリと見えてきた。

船内放送で、都井岬と志布志湾の入り口にある枇榔島の紹介がされているうちに、右舷前方にあった小さなその島の濃い緑の木々がくっきりとして見えてきた。亜熱帯植物の宝庫で特別天然記念物に指定されている無人島らしい。ひょうたん島にも似た形のかわいい島だ。

着岸の様子を見ようと後部甲板に出る。防波堤を過ぎるのに合わせて、かもめが歓迎するかのように、船の周りを飛び回る。小さな港いっぱいの巨体を巧みに回転させて、最後は横滑りしながら岸壁との海面が少しずつ狭くなり、僅かのショックもなく、定刻ぴったりの見事な着岸だった。

荷物をまとめ下船の準備をして、部屋の鍵を返しながら、フロントの若い女性に志布志駅までの行き方を聞いてみた。駅まで行く人などいないらしく、男性のパーサーも来て、バスがあるとかないとか、歩いて20分くらいだ、いやもつとかかるぞ、とかどうにも要領を得ない。まあ時間はたっぷりあるのでなんとかかなるだろうと、これ以上詮議するのはあきらめて、しんがりとなって下船口に向かった。



あつけらかんと、なにもない広い埠頭に下り立つと、風の冷たさにあわててダウンジャケットのジッパーを引き上げる。海の上より陸に吹く風のほうがいちだん冷たく感じる。

大型観光バスが一台だけぼつんと止まっていた。フロントガラスに「新春の霧島神宮参拝と黒川温泉めぐり」と書かれた紙が貼ってあり、昨夜船で見かけた元気なご婦人達にぎやかに乗り込むところだった。大きく口を開けた船尾から自家用車が数台走り出ていたが、あたりを見回してもタクシーもバスの姿もない。しかたなく、フロントの壁に貼ってあった簡単な地図の記憶をたよりに、駅まで歩くことにした。埠頭から分離帯をはさんだ広い3車線の道路が北へ伸びている。海側には松林のある緑地公園が続き、左側には飼料工場の大きな倉庫と、巨大なサイロが建ち並び、土曜日なのに操業中なのかブンプンと低い唸りをあげている。走る車もなく、人の姿も見えず、まるで無人の荒野を歩いているようだ。

標識には鹿屋とか鹿児島、都城方面とかの表示はあるが、志布志駅という案内が見当たらない。ようやく信号機のある交差点に出たが、あたりには誰もいない。はたしてどの方角へ行けばいいのかわ見当がつかなくなった。交差点に面して、農協マークのガソリンスタンドがあって、暗い事務所の奥にやっと人影を見つけ、駅までの道を尋ねると、青い事務服を着た女性が丁寧に道順を説明してくれた。はじめて聞いた志布志訛りは、どこか沖縄の言葉と似ていた。

用水路わきの公園で老人がひとり雑種の犬を遊ばせていた。鈍色の雲が広がり、ありふれた印象の町並みがさらに影が薄くなっている。教えられた角を曲がり、駅正面へ続く広い道へ出た。

さすがに、車はたまに通り過ぎていくものの、人影はほとんど見えない。歩道の陰に奇妙なものが見えてきた。テント屋根の覆いの下に止まっていたのは、オレンジ色の国鉄カラーのキハ17だった。

さらに近づくと、それは黒い車掌車を間にはさんで、先頭にC58蒸気機関車を連結した珍妙な3両編成だった。たしかに列車に乗るために、はるばる南九州まで来てしまったのだが、こんな思いもよらない歓迎を受けるとは夢にも思わなかった。公園内に置かれた、よくある保存車両なのかなとも思ったが、それにしては立派な本物の古い石積ホームと、昔風の腕木式信号機まで付いている。さらにC58にはクリスマスの名残なのか、イルミネーション電球といっしょに、正月の門松までが飾ってあるのも不思議な光景だ。後ろには車両の解説と、日南線の年表が書かれたかすれかかった掲示板があった。ホームに腰を下ろして、この思いがけない出会いをしばらく楽しんでから先に進むことにした。



建物より空き地が目立つ広い通りは遠くまでよく見渡せる。突き当たりになった交差点の奥に見えた3角屋根の建物が志布志駅のようだ。その手前には、サンポートしぶしくアピヤと大きな看板を掲げたスーパーがあったが、まだ開店前なのか広い駐車場は空っぽだ。草っぱらの先の、フェンス越しに短いホームと錆びたレールも見えていた。まだ学校は冬休みのだろう、静かな田舎町の朝、空ばかりがやけに広い。



体がぬくもりそうな喫茶店を探してみたが、駅前広場にはタクシーが1台止まっているだけで、あとは商店らしきものがどこにも見当たらない。駅の左半分にく志布志観光案内協会>の看板がかかっている、そこだけ明かりがついた店内では、女性が開店の準備をしているようだ。

壁の時刻表を見ると、午前の発車は早朝の2本をふくめ、7:00、9:00、11:43のわずか5本だけという寂しさに、ローカル線の終着駅の現状を思う。

案内所から2人の若い女性が出てきて構内の掃除を始めた。どこか近くに喫茶店はないかなあと尋ねると、姉妹のような二人は顔を見合わせて、この近所にはないわよねえ、と申し訳なさそうに語尾が上がり気味の喋り方は、ガソリンスタンドの女性と同じ訛りだ。バスで来たのですかあ と聞かれて、「さんふらわあきりしま」で着いて、埠頭からずっと歩いてきて、これから日南線でむかし住んでいた宮崎まで行くつもりのことを話した。つぎの列車まで2時間近くあるし、駅前には何もなし、どうしようかなあ。



あいう レンタサイクルならあります、無料ですし、とかたわらに置いてある自転車を指差した。 ああそれもいいかなと思ったけれど、しかしこの寒風についてのサイクリングでもなかりと、ちょうどタクシーの運転手がこちらを見ているの気がついて、そうだタクシーで小1時間ばかり市内を回ってもらおうと思いついた。

ふたりにそう言うと、それならこれをどうぞと、店の棚から観光案内パンフレットを持ってきてくれた。もうドアを開けて待ち構えるタクシーに乗り込んで、おまかせで街なかを回ってもらえますかと言うと、心得たとばかりに同年輩ほどの運転手は、はりきってアクセルをふかした。

車はついいましたがた歩いてきた広い道を進み、ちょうど SL とキハ 52 の前の信号で止まった。

「フェリーから歩いて来るときにこれ見ましたよ、古いホームまで持ってきたのですかね」「あんた、ここは昔の機関庫があった場所ですよ、あのアピアのあたりが昔の駅のあった場所です、私ら若い時分はずいぶん賑やかでね、ここからは大隅線と都城へ行く志布志線が出てたんです」「へえーそうなんだ、だからあんなホームも信号機もあるんだ」「そう、転車台もあったし、私ら鹿児島行くときは、大隅線で垂水まで行ってフェリーに乗ったもんです、15分おきにしょっちゅう出ていて便利だったよ」これで不思議なホームと、腕木式信号機の謎がとけた。

3本の路線が交わり賑わっていた頃の志布志駅を思った。「廃止されたんが、20年くらい前で、今でも線路の跡やトンネルもあって、都城へ行く線のほうは、駅の建物なんかもけっこう残ってるよ」と駅の話が口火になって、むかしは長距離のトラックを運転してたこと、東京へもよく行ったもんだ、年取ってからは志布志で自動車学校の教官をしていたこと、息子が結婚して相模原に住んでいることなどをさかんに話しはじめた。こちらむかし中学の頃宮崎に住んでいて、今日は同窓会で45年ぶりにきたこと、日南線に乗ってみたいくて「さんふらわあ」で大阪港から今到着いたばかりなどと、すこしだけ脚色をまじえての話をしながら、なごやかに打ち解けたドライブとなった。

街中を抜け、東へ10分ほど走って、緑にかこまれた神社の前で止まった。「ほらそこんところどつかい楠の木があるやろ、樹齢千年て言われてるんや、神社も古いで、奈良時代からあるみたいやで」



運転手氏の素人解説に、寒そうだけれどせっかくの好意なので、車から降りてお参りしてくるようになった。静かな境内は峻厳な気配がたどよい、初詣の人や巫女さんの姿は見えないものの、袴に白衣の神主が玉砂利を踏んで行き交い、お焚き上げの煙を浴びて、みごとな大楠が空をおおうほどの葉を茂らせていた。思わぬなりゆきに戸惑いながらも、歴史ある古刹の雰囲気をつかのま味わい、あまり待たせては悪いだろうと手短にお参りをすませてタクシーに戻った。



鳥居の手前でUターンした車は、アップダウンのきつい曲がりくねった県道を、いかにも走り慣れた運転で飛ばして行く。「あれが志布志城跡や」と指差した左手の小高い山のあたりには一面の茶畑がひろがっていた。

へえー、このへんはお茶も取れるんですか。そういえば鹿児島県の知覧とかもお茶で有名ですね。「そう、あんた、志布志茶はね、知らん人が多いけど、ほんとはね日本一なんだよ、火山灰の土がいいんだね、ここのお茶を持って行って、宇治茶とか言って売ってるんだから、ここらあたりが志布志千軒町いうて、昔からのお屋敷が多い町で、平安時代からあるらしいで」

いつの間にか車は石堀に囲まれた、立派な門構えの屋敷が並んでいる街並みを走っていた。ただの田舎町だとも思っていたら、志布志は昔からの歴史が残る由緒ある古い町のようなのだ。次に降ろされたのは細い道を登った山の中腹で、山門風の古い門の前だった。案内標識を見ると「天水氏庭園」とある。江戸時代に建てられた邸宅で、枯山水の庭園が国指定文化財になっているらしい。石段を登り、門をくぐって誰もいない苔むした庭石にはさまれた小径をひと巡りしてきた。向かい側を見ると壁に「天水製茶」と大きく書いた建物があって、どうやらお茶の加工場と直売所らしい。「あれが今の本家だよ、寄ってみますか」と言われたけれど、お茶のお点前までしていたのでは、列車の時間が心配だ、風情だけを目に焼き付けて天水村を後にした。

タクシーは山をくだり、川沿いの道をしばらく行くと、山がせまった崖がそこだけ開けた一角に駐車場がありその奥に寺の本堂が見える。「宝満寺いいます」安産の御利益があって、この寺の腹帯守りをして子供が無事生まれると、みなお礼参りに来て涎掛けを奉納する習わしがあるのだという。



畔池をめぐらせた庭園に石橋が架かり、背後の山懐にいだかれた古刹だった。賽銭を投げ入れ、ひとり参りをしたの戻り道、産着にくるまれた赤ん坊を抱いた若い夫婦が、ちょうどお礼参りにきたところに出会った。聞くとまだ生まれて3週間目だという。「おめでとうございます、お礼参りですか」との問いにうなずいて「どうもありがとうございます」と、お堂の方に仲良く向かって歩くふたりの後ろ姿を見送りながら、暗いお堂の中で見た、運慶作という如意輪観音像と重なって少し涙が出そうになった。

車に戻って「いい雰囲気のお寺でした。よだれ掛けがいっぱい奉納してあってびっくりしましたよ」と言うと「私の長男夫婦にも、孫が生まれた時には、腹帯を送ってやりましたよ。4月の釈迦まつりも、シャンシャン馬行列が出てそりゃあ賑やかなもんです、じゃあこんところで駅に戻りますかね」との

言葉に、帰りは町の繁華街を通ってほしいと頼んだ。

タイムマシンとなったタクシーは、あつというまに現代に戻り、気がつくとメインストリートを過ぎて、いくつかの銀行の前を過ぎると、郵便局の角を曲がって狭い横丁に入った。「ここが昔いちばんにぎやかやった三業地ですわ、左の建物はむかし映画館だったです」と通り抜けたひと気のない小路には「銀座街」の錆び付いた看板がかかっていた。駅前に戻ってタクシーを降りると、折り返し列車となる青帯のキハ52が1両、ぼつんとすでにホームに止まっていた。長い時間を旅した気分だったが、駅の時計を見るとまだ1時間も経っていませんでした。

案内所のふたりに、大クスと天水庭園とかを見てきたよ、と報告してから誰もいない改札口をくぐって車内に入った。



後ろの扉から整理券を取って乗り込むと、派手なファッションの高校生たち数グループが、どこへ遊びに行くのかボックスシートにたむろしていて、賑やかな車内だ。昔の遺跡のような古い町なのに、どこから湧いて出てきたのか、こんな今風の若者達が乗っているのが意外だった。

オールドタイマーのキハ52は、年代物のエンジン音を震わせて、大隅半島の冬枯れた景色の中をゆっくりと走り始めた。

雑草におおわれてしまいそうな頼りなげな細いレールが続いている。ときおり灌木の伸びた枝が、ピシッと窓ガラスに当たって驚かされる。列車はたまにしか通過しないいうえに、亜熱帯植物が育つ南国では枝の方が早く伸びてしまうのだろうか。線路わきのみかんの木にまじって、キンカンの黄色の実が目につく。フェリーでの夕食時、バイキングな料理が並んだなかにキンカンのシロップ漬けがあって、めずらしいなと思ったがこのあたりの特産なのかもしれない。

列車は志布志湾を回り込むようにして、ゆるやかな勾配を上って行く。湾のはるか対岸にフェリーのオレンジ色の太陽マークの船体が小さく見えていた。名残を惜しむようにエンジン音が高まると、列車は山越えに入った。

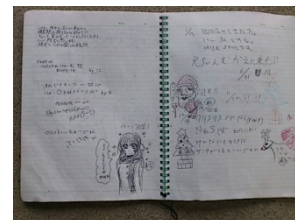
「福島高松」というふしぎな名前の小さな駅の魅力的なたたずまい。ひと駅ずつ降りて訪れてみたい個性的な駅舎が続く。短いトンネルが続くようになり冷たい風が入ってきた。コンパクトを開いていた若い女性が一度上げた窓を下げようとするが、うまく出来ない様子だった。やってみましょうと名乗り出て、ノブをつまんで何度かやってみたがガタピシの古い窓は動かない。渾身の力を込めてやっと下げることができた。



席へ戻って横を見ると、女性は何事もなかったようにアイラインを直し始めていた。列車は見事な杉の木が目立つ山中に分けいっていた。山ふとこにいだかれた里山の懐かしい景色が続く。海と山との豊穡な恵みを感じさせる見事な場面転換、この路線を走る観光列車「海幸山幸」号の名前の由来を実感させられる。

榎原(よはら)駅での対向列車の交換待ちの間、ホームに降りて誰もいない陋屋のような駅舎に入って、ベンチに置いてあった駅ノートを開くと、こんな書き込みがあった。

”今日は彼女に会いに来ました  
榎原駅で、降りたのは初めて！！  
ちょっと草がボーボーでビックリしたけど  
いい所だと思います  
彼女と今日は楽しみます ハート印 ”



こんな山間の小さな無人駅にも、生々しい若い息づかいがあって驚かされる。列車に戻って観光案内所でもらったパンフレットを見てみると、近在の榎原神社は初詣で賑わう縁結びの神様でもあるようだ。まだ見ていなかった大楠の神社で貰ったおみくじを開くと、運勢は中吉、旅行は「遠くは行かぬが利」縁談待ち人「あまり深入りするな」とあった。

途中の南郷駅で「海幸山幸」号とすれちがったが、杉板張りの車内はからっぽで、どちらの神様の姿も見えなかった。車窓に再びあらわれた海は大堂津海岸。沖合には奇妙な形の岩や、大きな島が点在している。海岸線に沿って西に大きくカーブしてしばらくすると、オイルタンクや港の岸壁が見えてきた。広い構内が見えてきてブレーキがかかると油津駅に着いた。



アイシャドウの女性のあとに続いて下車する。スロープになったホームの先から線路に下りて構内踏切を渡ると、巨大なウチワサボテンがユーモラスに出迎えてくれた。レトロな格子模様になっている高い天井、静かな昼下がりの待合室には、まるまると太ったきじネコが豪勢な飴肥杉のベンチの上で寝そべっていた。猫駅長の喉を撫でてご挨拶をすると、自分の役目は終わったとばかりに、悠々とした足どりで事務所のなかに入って行った。

油津から宮崎までは、飴肥山中に分け入る鉄道ではなく、景色の良い海沿いの国道を走るバスに乗るつもりだ。バスの発車時刻まで1時間半ほどの間、待合室の地図で見た古い運河と赤レンガ倉庫まで行ってみることにした。大正から昭和の初めにかけて、飴肥杉の積出港として栄えた頃の町並みが保存されているらしい。駅前ロータリーで居眠りしていたタクシーの窓を、コツンと叩いて乗り込んだ。

まだ若い運転手氏は、ワンメーターほどの近さなのに不満な顔もせず、煉瓦倉庫に着くまでの間、ずっと観光ハイヤーばりのガイドをしてくれた。木造でできた夢見橋、寅さん映画の記念碑とロケをした床屋、明治末期に出来た堀川運河などと、矢継ぎ早に説明を受けたあと「この奥にレンガ館がありますから」と降ろされたのは、銅板の緑青が見事な金物屋「杉村本店」の前だった。



昭和初期に建てられた古い建物の重いガラス戸をゴリゴリと開ける。人の気配がしない静まりかえった店内では柱時計も止まり、埃をかぶった商品が時間が止まったままの長い歳月を物語っているようだ。しばらくたらずんでいたが、誰も出てくる気配がないので外に出た。店先の陳列窓には、船具などが錆びたまま転がり、路地横の倉庫には「杉村一号倉」と染め抜かれた柿色の暖簾が下がっていた。その向かいが、修復保存された赤煉瓦館のようだ。レンガのトンネルみたいな入り口をくぐると中は広く、いくつかの部屋に分かれていた。ボランティアなのだろうか、気さくそうに中年女性が近寄って来て説明を始めた。古くなったレンガ倉庫が解体されようとした時に、地元有志が後世に残そうと共同で買いとったのだという。内部は改装され耐震補強の鉄骨がアクセントになって、モダンなギャラリー空間になっていた。薄い杉皮を使ったランプなどの作品が展示されていて、暗いレンガの壁に幻想的な光と影を映している。何処から来たのかと問われて、東京から来て今朝フェリーで志布志へ着いたこと、45年ぶりに宮崎で中学の同窓会があるので、これからバスで向かう予定だと、また少し脚色を交えた来歴でお茶をにごしておいた。若いカップルが入ってきたのをこれ幸いと、詮索をかわしてレンガ監獄を後にすることができた。倉庫でもらった地図を見ながら、ブラブラと駅まで歩くことにした。死んだように静かな街は、ほかに歩く人の姿もない。



ときおり運河の川面で魚の跳ねる音が響く。寅さんの映画では、風吹ジュン扮する運河沿いにある床屋の女主人とよい仲になるが、いつもの成り行きで決して二人は結ばれることはない。榎原神社に初詣に行った御利益で、あの駅ノートのカップルは幸せになるのだろうか。そんなことを考えながら、運河に架かる石橋を渡って駅への近道をブラブラと歩く。途中ささやかなアーケードがある商店街を抜ける。閉まった店と空地が目立ち、猫以外歩く人もいない。背中を向けた男が一人、憔悴と空き地に座っていた。食堂を探しながら横丁を抜けると、あつけなく駅前に出た。ロータリーでは奇妙な形の銀色マグロ彫刻が一匹、寒空のなかを泳いでいた。人間よりも猫と魚が多い町だった。

広場に面してバスの営業所があり、その隣にある古いビルの喫茶店が営業中のようなのだ。手前に車を止めるスペースがあり、奥まった入り口は薄暗く、花やゴムの木の鉢が置かれて窓も壁もツタに覆われていた。怪しげなムラサキ色のドアからは、中の様子は窺えない。おそろおそろ開けると、店内はいたって普通の喫茶店風で、ほかに客は誰もいなくて、いらっしやいませと振り向いた女主人は、どこか都会的な雰囲気的女性だった。



熱いおしぼりで一息ついて、テーブルのビニールに挟んであるメニューを見ると、やはり宮崎の喫茶店定番メニュー、白熊とミルクケーキがあった。「あっ、やっぱりあるね、白熊だ、懐かしいね」と口火を切ると「どちらからですか？」とやはりここでも尋ねられて、今日4回目になる来歴を話すことになった。「エッ！東京からですか、地震のときは大丈夫でした？」とこんな田舎町の人にしてはその反応の強さに戸惑っていると「娘がその時、トヨスのマンションの19階に住んでいましたの」という。トヨスが豊洲であることを理解するまでしばらくかかったが「それはたいへんでしたね、大丈夫でした

か」と尋ねると「あの原発事故のあと、すぐ大使館から帰国するように言われたのですよ」と言われてまた頭が混乱してきた。娘さんが留学していた時に結婚した夫がアメリカ人で、生まれたばかりの幼い子供がいること、夫は日本が好きでふたりで話し合った結果、奥さんの実家のある油津で暮らすことに決めたらしい。

さいわいアメリカ人の夫は、外資系会社のシステムエンジニアで、こんな田舎でも支障なく仕事ができるのだという。

「あのあとみんなが東京に水を送って、このへんのスーパーでもどこでもすっかりペットボトルが無くなってしまったんですよ」

まさかこんな場所で震災の話が出るとは驚いた。さすがに日本びいきの夫でも、スタバもマクドもないこの町ではストレスがたまっているみたい、と笑っていた。

堀川運河と赤煉瓦館を見てきたよという、むかしそこで寅さんのロケ撮影現場を見ていた話から、飴肥出身の小村寿太郎が活躍する「坂の上の雲」のドラマの話題になり、奥から人のよさそうな主人も出てきて話しに加わり、すっかり盛り上がりってしまった。

気がつくとバスの発車時刻が迫っていてあわてて勘定を払い、隣のバス乗り場に急いだ。宮崎までの切符を、という「1800 円の 1 日乗車券と金額が同じですがどうなさいますか？」との窓口嬢の言葉に、途中下車をするつもりにちょうどよい、渡りに舟とそのアドバイスに従った。

14時ぴったり時間通りにやって来たバスは、2時間近い長距離路線のわりには、後ろ乗り前降りのごく普通の路線バスだった。整理券をとって、7名ほどの乗客の先頭で乗り込み、最前列の特等席に腰を下ろした。そういえばさっきの喫茶店の名前を見ていなかったと、動き出したバスの窓から振り返って見ると「和光」と小さく看板が出ていた。ちょうど雲が切れ陽もさしてきた。

日南海岸の絶景が楽しめそうだ。途中のバス停から乗ってきた老人たちは郊外にある病院通いらしく、運転手氏と顔馴染みの様子で、親しげにひと言ふたこと言葉をかわしてから、ゆっくりとバスのステップを降りてゆく。20分ほど走ると細い旧道に入り、小さな集落のカーブを過ぎると、鶴戸神社入り口バス停に着いた。

海岸の断崖の奥に本宮が祭ってある昔の鶴戸神社は、記憶の中ではいつも観光バスで混雑していたはずなのに、今日は参拝客も見当たらず昔の賑わいが見られない。それでもひと組の参拝帰らしい家族連れが乗り込んでくるのを見ると、この場所に間違いはなさそうだ。腑に落ちない気持ちにおかまいなく、バスは広い国道に合流するとスピードを上げて走りはじめた。

やがてフェニックスの並木のあいだから、日向灘の青い海が目に見え込んできた。けれど45年前の景色とはなにかが違って、別の世界を見ているような気持ちになってしまうのはなぜだろう。この先にあったはずのサボテン公園には、中学時代に遠足で何度も訪れていた。

日当たりの良い海を望む山肌一面に、さまざまなサボテンが植えられたテーマパークで、いつも観光客であふれていたものだ。



あれからもう半世紀、今でもはたしてまだ残っているものだろうか。伊比井、内海と入り江ごとに点在する小さな集落を過ぎては、また断崖沿いの道を走るうち、あっこれだ！と見つけたその場所は、バリケードで囲われ「サボテン・ハーブ園」の看板もかすれて消えかかった無惨な廃虚となっていた。バス停に名前も、サボテンの姿もどこにもなく、写真を撮る間もなくバスは通り過ぎてしまった。国道なのに車の往来が少ないのは、この険しい海岸沿いの道を避けて、トンネルで貫くバイパスができているからだろう。植えられたフェニックスはどれも小ぶりで、かつての迫力はない。そして沿道いちばんの名所だったはずの堀切峠の停留所にもバスは止まりもせず、あっけなく通過しまった。フェニックスにも冬枯れの時期があるのか、どこか生氣のない様子で寒風にさらされていた。記憶の中の景色との微妙なズレは、冬の陽射しのせいばかりでもなさそうだ。峠を下りきって青島の町中に入っても、立ち並ぶ土産店は閑散として、さびれた温泉街にも似た雰囲気は漂っていた。

少ないながらも途中での乗り降りがあって、バスは7、8名ほどの乗客を乗せながら、冬の日差しを背にのんびりと走る。青島を過ぎてすぐ「次は～こどもの国正門ゲート前～」とのテープアナウンスに、あわてて降車ボタンを押して下車すると、バス停のすぐ前が日南線、子供の国駅。ホームに上がると、下り油津行き1両編成のディーゼルカーがエンジン音も高らかに発車していくところだった。誰もいない待合室はあつけられんと、早い冬の西日を受けていた。

向かいの海側、高いヤシの木のある洒落た建物が、こどもの国の正面ゲートになっているようだ。昔はこんな雰囲気ではなかったなと思いながら、道路沿いに仲良く2軒並んだいろいろの店を物色して、赤と黄色の派手な箱につられて左側の店に入ってみた。店内でも食べられるように古びたテーブルと椅子が置かれているが、最近はそのような客もいないのか使われた形跡もなく、ほとんど物置となっている。店の奥から、見るからに愛想もなさそうな職人風の親爺が出てきたので、ここで食べたいけどいいかなと聞いて、いちばん小さいものをひとつと頼んだ。

すこし怪訝な顔をしながらも親爺は、テーブルに積んであるむろ蓋の布巾をとって、きちんと並んでいた白いういろを、5切れとって経木にくるんで出してくれた。木目がきれいな薄い経木からは、杉の香りが漂って、豆腐色のういろは、箸でつつくと柔らかな弾力が伝わってくる。口に入れると少し粗めの生地 of 食感とほんのり甘い懐かしい味は、ずっと覚えていたその味と同じものだった。

今日はじめて昔の記憶と変わらないものと出会ってうれしくなる。

「おいしい！うまい！昔とおなじ味だ」というと、となりで見ていた親爺が笑った。

「うちのは上新粉と砂糖だけしか入ってないからね、日持ちはしないよ、でも一晩たったやつのほうが、しっとりして俺は好きだね」はじめは無愛想に見えたが、そうでもなさそうだ。めずらしく向こうから聞いてこないの、今日5回目になる同じ来歴をくりかえし話して、このういろが食べたくて立ち寄ったんだ、というとすこしだけ喜んで「昔はなあ、毎日飛ぶように売れたもんだ、こどもの国も、人がいつもいっぱいでああ、今じゃこんな遊園地だれもこないよ、ゴルフ場ができて駐車場もせまくなってな、大型バスも止まれんようになっちゃった」とため息をついていた。うす暗い店で親爺の愚痴をききながら、やはり立ち寄ってよかったと思った。



半分残ったいろいろを、今夜の夜食用にとまた経木にくるんでカバンにしまって、店の前のバス停で、もうすぐ来るはずの宮崎橋通り行きの宮交バスを待った。

バスは、小さな橋をいくつか渡り、曾山寺、木花、と聞き覚えのある地名のバス停を過ぎて行った。しかし中学生のころ何度も通ったはずの記憶とかさなる風景は、どこにも見つからない。夏の盛りに暑さに挑むような赤い花をつけた夾竹桃も、春には黄や紅色の花が妙になまめかく続いていた沿道のカナの花壇にも出会うことはできなかった。バスは国道からそれて、新しい造成地の住宅団地へまわり道をしてから、夕方のラッシュで渋滞気味になった市街地に入っていった。

日豊線ガードをくぐるとまもなく、バスで混雑する宮交シティターミナルに寄り、そして高いヤシの木がそびえている南宮崎駅前を曲がると、すぐに大淀川に架かる橋橋を渡る。風格を感じさせる石造りの欄に、レトロな街灯が連なり、河岸にホテルが立ち並ぶ風景が懐かしい。河口に近い川は満潮にあたるのか、豊かな水面にビル影を映して滔々と流れている。

メインストリートの橋通りを、混雑する車をかき分けて進み、山形屋前の停留所で下車した。交差点をはさんで二つの百貨店があり、その周辺が盛り場となっているのは昔と変わらない。

バスを下りた途端、南国宮崎とは思えない冷たい北風の出迎えを受けた。デパート横から西へのびる狭い街筋が、アーケードのある繁華街になっている。暖かそうな店の明かりにつられてアーケードの中に入るが、ガラスの屋根が風の道になるのか華やかなショーウィンドにも風が吹きぬけ、おもわず襟を合わせるほどの寒さに首をすくめる。まだ空の明るさがのこるガラス天井に、星形のイルミネーションがキラキラ点滅している。尋ねて行くにはすこし早すぎるだろうし、冷えたからだを温めようと、見慣れた赤い看板があった店に駆け込む。

ドアが開くと、コーヒーとハンバーガー、ポテトが混じったいつもの匂い、暖かな店内は高校生たちのグループに占領されて賑やかだ。場違いな客なのを気にしつつ、カウンターの片隅に座って地図などを広げ観光客のふりをしながら彼らの話をうかがう。奥の席に散らばったグループらは顔見知りなのか、女性徒にチョコパイをだしては、軽くあしらわれて歩き回るパシリ君もいたり、彼らの他愛のない話を聞きながら、むかしこの近くにある中学校に通っていた頃の、放課後の時間を思い出していた。



もしあの頃がこんな風なら、生真面目な中学生だった私は、今と同じように離れたカウンターでひとり本を読んでいただろう。こんな時に彼女は後ろからやって来て、背中に何やら指で字をなぞったりして、あっと思って振り返ると知らんふりをして通り過ぎていたかもしれない。クラスも違っていたのに記憶の中では、なぜかいつもすぐそばにいたような気がするのはなぜだろう。

新聞部や図書部で貸出し係をしていた時、気がつくとWも同じ係になっていて、授業中の姿は知らないのに、放課後になるといつでもいっしょにいたような気がする。

ぼんやりそんなことを考えていたら、ドンと背中に硬いものが当たって、どきっとして振り返ると「あっ！すみません」とテニスラケットを抱えた長い髪の女性徒が、振り向きもせず狭くなった通路を奥の席へ駆けて行くところだった。

冬休み前の放課後、たまたま教室の前を通りかかると、うす暗いなかWが一人で泣いているのを見かけたことがあった。見てはいけない秘密を見た気がして、声もかけられず立ち去ってしまった。そのあとの夏、街の北外れの埴輪園の裏手に瓢箪のかたちをした大きな池があって、学校新聞の取材のため彼女と二人で鬱蒼と樹々が繁る暗い池の周りの小道を一周したことがあった。そこは何か秘密めいた場所でもあったのか、けもの道ほどの険しい湖畔の道をたどり、梢から洩れる光と蒼い水面に誘われるまま歩いていた幻のような記憶。その時突然現れた小さなヘビに驚いて、悲鳴を上げた彼女がぶつかるようにしてきたとき、腕に抱いた躰の温み、その編集会議の時、何かを取ろうと伸ばした私の二の腕を突然ギュッと掴み、艶然と微笑んだままこちらを見ていた。

卒業後一度だけWと会ったことがあった。小倉で親戚の仕事を手伝っているという彼女と待ち合わせをして、その運転するおんぼろの軽自動車に乗せてもらい、一日中あてもなくドライブして夜遅く駅まで送ってもらった。彼女は、朝来る途中で拾ったのよといって、小さなみすぼらしい子猫を抱いて来た。卒業したあと、4年目の暑い夏の日だった。その日どこへ行って何をしたのか、白い記憶につつまれたまま思い出せない記憶。以来連絡をとることもなく、時間だけが経ってしまった。あの時、腕を掴んだまま彼女は何を言いたかったのだろうか。そしてあの日小倉駅に子猫を抱いて現れたのは、ほんとうにWだったのだろうか。私は何を確かめたくて、ここまで来てしまったのだろうか。

外へ出るといちだんと風が冷たくなった。華やかな商店街も夕闇に包まれ、逢魔が時の気配にゾクッと身震いしたのは寒さのせいばかりでなさそう。調べてあったその店の住所だと、ほんの目と鼻のさきのはず。アーケードが途切れると、道の両側は居酒屋やバーが立ち並ぶ盛り場に変わった。はやる気持を押さえながら、角を2つ過ぎてこのあたりだろうと目星をつけた建物で「家庭料理わらび」の看板をさがしてみた。そこは白いタイル張りの4階建の雑居ビルで、壁には異様に大きな文字で数字の90と書いてあり、0のところが丸くくり抜かれていて怪獣の目玉のようにも見える。入り口の看板には、フロアごとの営業している店名が出ているが、しかし何度見直してみてもその中に「わらび」の文字がない。番地を表す標札がないので、はたしてこのビルが探していた場所がどうかも不安になってきた。念のためもう少し近所を探してみようと、角を曲がり裏手の方へ歩いてみた。夜のとばりがさらに寒さを孕んで薄暗さを増してきた。表通りをはずれると、空き地や駐車場のある住宅地になっていて、道を尋ねようにも誰も歩いていない。以前住んでいた社宅はこの近くだったはずなのだが見覚えのある場所もない。



探しあぐねたまま一周して、またビルの前に戻って途方にくれてしまった。するとその時、ビルの奥の暗がりから、一見遊び人風の男が出てくるところで、少し躊躇しながらも思いきって声をかけてみた。

このビルの一階に「わらび」という店がないだろうかと思ねると、男は何か思い当たることがあるのか、今はそんな名前の店はないけど、奥の店が最近できたばかりで、もしかしたらその前の店がそうなんやろか、と予期しないやさしい大阪なまりで答えた。ほかの店の人間なのか、客なのか判断しかねるまま詳しい説明はせず、東京から来て「わらび」という店を探していること、そしてたぶんその変わった名前から、昔の知り合いがやっているのではないか、と思っていることを立ち話で話した。

すると私の胡散臭い話を聞いていた男は、やおら携帯を取り出して誰かに電話をかけ始めた。戸惑うこちらをよそに、どうやら相手は女性のようなのだが、話の内容は良く聞き取れない。向き直った男は、ここの店の人がもうすぐ帰ってくるから聞いてみようよと、奥にある店の玄関を指さす。家庭料理までは同じだが、名前は「芭紗路」となっている。じつは自分もこの店に来たんやが、ママさんがいないんで携帯に電話したんやとのこと。どうやら近所に買い物に行っていた芭紗路のママさんがすぐに帰ってくるらしい。言葉が宮崎弁ではないので尋ねると、最近大阪から宮崎に来たのだという。彼にもなんだか事情がありそうだが、そんな話をする間もなく、すぐ近くにいたのか電話の相手らしき女性が買い物袋を下げて戻ってきた。30代半ばぐらいだろうか、ゆるくウェーブがかかったセミロングの髪に、化粧もうすい小柄な顔立ちは、とても料理屋のママさんには見えない。男の仲介をはさんで、この住所にあるはずの「わらび」という店を尋ねてきたことを説明した。1階には4軒の店が入っているが、家庭料理と名がつくのはこの「芭紗路」だけだし、何か知っていることはないだろうかと思ねてみた。

袋を下げた女性は、こちらを見つめたまま、私の店は去年の7月の七夕に開店したばかりで、むかしのことはわからないし、この店の前はたしか「おちよぼ」という名前の店でしたと、すまなそうに、しかし何かを探るような眼差しでこちらを見ていた。

それで、中学生の時このT町に住んでいたこと、その頃と同級生がその店をやっているかもしれないと思ねて、45年ぶりに東京からやって来たことなどを話してみた。それでもやはり、ふたりとも「わらび」という名前は聞いたことがないよね、と口をそろえる。いやこちらこそ変なことを聞いてすみません、場所違いかもしれないし、もう何年も前に引越したかもしれませんから、どうもありがとうございましたと、礼を言って引き上げることにした。はりつめていた風船がしぼんだ気持だが、いきなりその店でWに会えることなんて期待してはいけない、かえってこれでよかったのだと思うことにして、二人にいとまを告げて さっきまでのフィルムを巻き戻すような気持ちでアーケードの方へ向かった。

次に乗る予定にしていた、大分行き最終「にちりん」まで、ゆっくり街をぶらつきながら駅まで散歩でもすればちょうど良いかなと思ねていた。残念な気持とどこか安堵した気分とがないまぜになった心持ちで歩き始めた。その時だった、オーイ！と叫ぶ男の声に呼び止められて、振り向くとさっきの大阪男が、戻ってくるようにと手をふっている。どうしたのだろうかとお互い歩み寄って近づくと、よかったです軽く食事だけでもしていったらって、ママが言うるとるんやと、男が言った。

突然の成り行きに戸惑いながら、振り向くとビルの前では、あの女性もこちらを見ていた。偶然この場所、この時間で男と出会ったのも何かの縁だし、家庭料理と名前がついた店なのも偶然とはいえ、赤い糸がからまった気持でこころよく招待を受けることにした。

和風のしつらえの店の前には、見事な墨蹟の謹賀新年の半紙がまだ貼られ、そのとなりには元旦から営業する旨の知らせが、こちらも達筆な字で書かれていた。営業時間前なのにいいですか、と女性に言うと、まだ準備ができなくて有り合わせの物しかなくてごめんなさいと、入り口の鍵を開けながらすまなそうに言う。格子戸を引くその横顔に見とれていると、当然いっしょに入るものと思っていた大阪男が、じゃあまたあとでくるわと言い残し、あたふたと去って行ってしまった。

これではまるで亀の背中に乗せられて来た浦島太郎ではないかと思えた。明るくなった店内は、5、6人が座れるカウンターと、小さなテーブルが二つあるだけの狭さだが、あたたかな居心地のよさは、まさしく竜宮城かもしれない。

ほかに誰もいない店内で、赤いエプロンをつけた乙姫さまはカウンターの中で、慣れた手つきでコンロの火をつけたり、冷蔵庫を開けたりと、さながら台所に立つ新妻のようでもある。差し出された熱々のおしぼりを握ると、ついさっきまであの寒空の下にいたことが夢のようだ。まだ準備ができなくて、なんにもありませんが、とカウンターに正月らしい小鉢に入った黒豆が置かれた。ひとつつまんだ艶やかな豆の絶妙な味わいに思わず、美味しいを連発してしまった。お酒はと聞かれて下戸なのでと答えるが、この雰囲気飲まずには居られないだろうと、じゃあでも一杯だけでと言いなおした。

お正月ですからこれで、冷やですけど「祝」です、と派手なラベルの寿ぎ酒がグラスにすこし少なめ加減に注がれた。一緒に出された薄い煎餅のようものは、ちりめんを揚げたのだという。コンロの音しか聞こえない静かな店に、パリパリと音を響かせながら、探している彼女のことを問わず語りにも聞かしてもらった。

ほら、他の子とはどこか違って、どうしても普通の女性とは思えなくて、とりたて美人じゃあないのに、この子はきっとトイレにも入らないし、ゴハンも食べない、そんなふうには思ってたんです、もしかしたら宇宙人だったかもしれない、などと勝手に話しながら、それではまさに乙姫さまのことじゃあないかと、もう祝酒が回ってきたのだらうか、似合わない饒舌さに自分でも驚く。元旦から営業していたんですねえ、と話をかえると、ええちょうど私の誕生日だし、もう40歳なんですよ、それで元旦でもお客さん来てくれたんですよ、そのお花もお客さまから頂きました。視線の先の飾ってある花籠には、バースデーカードが付いていた。尋ねると宮崎ではなく生まれは福岡だという。もらったショップカードに名前がないので尋ねると、ゆかりですと書いてくれた。芭紗路って変わった名前ですね、水泳でもしていたんですか、という、いいえ私の田舎の方言でたくさん、いっぱいという意味なんです、たくさんお客さまに来てもらいたくて、まだ始めたばかりで、がんばらなくちゃ、でも宮崎のお客さんみんないいひとばかりだと素直そうな人柄がにじみ出てくる。

この優しさとその料理の味では、ファンも大勢いることだろうと思わせた。大根と鯖の煮付けの、優しい味付けもこれも美味しいと誉めあげて、つい柄でもなくもう一杯の日本酒を頼んでしまった。田舎って福岡のどこだろう、そんな方言聞いたことないね。秋月っていいです、今は朝倉市になってしまいましたが、小さな古い町です、ご存知ないですよ。いやあ秋月、知ってますよ、フーテンの寅さんが余命短いテキ屋仲間の奥さんを尋ねて行った町で、たしか音無美紀子が出てましたね、

前から一度行ってみたいと思ってたんです。振りかえった壁に、髪をアップにした着物姿のゆかりさんの、小さなポラロイド写真がピンでとめてあった。暮れにお客さんが写してくれたんですよという。

開店前、誰もいない店で、ゆかり乙姫さんを独り占めした時間は、夢のように過ぎてしまった。朝までずっとこうしていたい誘惑にかられながら、軽く入れてもらったご飯と、急いで作ってくれたらしいシジミのみそ汁もいただいて、時計を見るともう「にちりん」の発車まで20分しかない。あわてて上着をとって勘定をしてもらった。店を出るときに玄関で握ってくれた小さな手は、しっとりして暖かかった。通りへ出ると、呼んでくれたかのようにタクシーが目の前に止まっていた。

車に乗り込んでから、40年前のあの時、小倉駅に彼女が運転してきたボロボロの軽自動車は南の方へ向かったが、行った先はもしかしたら秋月の辺りだったかもしれないという思いがよぎった。まさか、そんな出来すぎた話はあるわけないと「祝」で火照った頭にいいきかせた。そして芭紗路に来たはずのあの男は、急にどこへ行ったのだろうか。あわてて立ち去った様子は、誰かに何かを伝えに行ったのではないか、そんな思いがわきあがってきた。



もしそうだったら野暮なことをしたものだ、何も考えてなくてお釣りなどもらってしまって馬鹿な男だ。ほんとうに私が払うべき金額はいくらなんだろう。心をきめて電話を取り出し、前もって調べてあった「わらび」の電話番号をはじめてダイヤルしてみた。激しい動悸は、日本酒のせいと思うことにした。しかしどこへ繋がっているのか、呼び出しの電子音は闇に吸い込まれるように、いつまでもむなしく鳴っているばかりだった。

竜宮城帰りの、亀ならぬ黒いタクシーは混雑する駅への広い道を、車の光をかき分けながらスピードを上げた。



2012 冬 オデッセイへの旅